



ペピの観察記録: 1歳

■第35回目の訪問 〔概略〕 ペピ; 12ヶ月 & 3週目 1975/01/06 (5:10-7:20pm)

私が玄関口で待っていると、Mr. & Mrs. Pそしてペピの家族全員がようやく買い物から戻ってきた。車から降りたペピの両親と私が挨拶を交わしている間、彼は私の顔を落ち着いた笑みを浮かべて見上げている。彼は靴を履いていた！それは赤い靴であった。それで彼はなんだかとてもハンサムな男の子って感じに見えた。P夫妻はペピの傍らに立ち、その両側から彼の手を握ってやっていた。彼は歩いていた！それから彼らのフラットへ上がる階段を母親がペピを横抱きにして進み、Mr. Pと私はその後続いた。ちょっとの道程であった。彼らは3階に住んでいたから。母親は階段の途中でペピを降ろして、彼を這わせようとした。〈1歩、2歩…よ〉と声掛けし、注意深く彼が階段から落ちないように目を離さずにいる。ペピはいかにも自信ありげな笑みを浮かべて階段を這い上がる。時折数歩先に行く私の方へ眼差しを向ける。しばらく経って、母親はもう十分に歩かせたと思ったのだが、意外にもペピはまだやる気充分で、尚もしっかりと階段を這って上ってゆく。われわれは幾らか驚き、彼の力強い手足の筋力に興奮した。〈くたびれちゃったんじゃないの？〉と母親がちょっと案じて、彼に問うた。実際のところ、彼はついには全階段を上りきったことになる。

それほどにも体力を消耗させたわりには、彼は全然疲れたふうではなかった。彼はキッチンのなかでしばらくろちよろしていたが、やがて戸棚へと向かった。その扉を開けようとするみたいだ。母親はすぐさまこれに反応し、〈あれ、何を探しているの？ あっ、分かった。ビスケットでしょ？〉と言う。そしてビスケット入りの缶を取り出し、その中からビスケットを一枚ずつ皆に配った。ペピは満足げに手にしたビスケットをしゃぶったり噛んだりしている。それからまたろちよろし始めた。どうやら辺りを物色しているようだ。J.はお茶の用意をしながら、ペピから目を離さないようとしている。そして不意に、〈この子は、まるでチャールズ・チャップリンみたいな歩き方をするねえ〉と言った。それで皆が笑った。ペピは、私の傍らを通り過ぎた。私は、彼が目を頻りに瞬(まばた)きをしているのを認めた。何だろうと訝った。顔のチック症状かと思ひ、そこで何か彼に情緒的な問題があるのかしらと怪訝に思う。だが彼は私の顔を見上げて、いかにも悪戯っぽい笑みを浮かべているのだ。しつこく瞬きをしたり、しかめっ面をしたり…。そして私は突如、なんと彼は私を模倣していることにハタと気づいた！この目の瞬きは当時の私の癖であつたろう。さらには、そんなふうにして私をからかっていることが分かった！彼の観察眼には脱帽だ。他者と一体化することでその顔の微妙な表情をそっくり真似るスキルがあるだけでなく、そうすることでその誰かさんを揶揄するということをも彼は知っている！なんと大したおどけた道化師(!)だと驚き呆れた。

〔※補足; ペピが目をパチパチ頻りに瞬きするのを私が初めて認めたのは第26回目の訪問の折で、彼は9ヶ月 & 2週目(1974/09/27)であった。観察メモには、何やら情緒的な問題が表出したかと気遣うような記述がみられる。その時点で、それが私の表情の癖をそっくり真似ているとは思ひも寄らなかつた。だがその1ヵ月後(1974/10/31)、ペピはたまたま目撃した私のあくびやら咳を模倣している。

だから幾らか意図的に私を我が身に‘写し込んだ’ともいえる。やがてこの時点に至り、明らかにそれがそうだと思い付いたのも実に迂闊な話だが…。観察者としての自分を黒衣（くろこ）とばかり思っていたのに、どうやら私は彼にしっかり‘観察されていた’というこらしい。それだけではなく、私の気分を読んでいたのではなからうかと思われる節がある。あの当時を振り返ると、私はSt. George’s Hospitalでの勤務に就いて間もない頃で緊張していたのは事実だ。彼にはどことなく物思いに沈んでいるふうに見えることもあったろう。だから単純に揶揄されたということではなく、そんな私を気遣って、もしかしたら元気づけ（Cheer Up！）してくれたのだと思えば、可らしいやら嬉しいやらでちょびり涙が出る。因みに、ペピの母親は、相手に自分を一体化するうちに精神的な重苦しさがしのびこんでくるように感じた折には、それを撥ね除け緊張を緩めようとするのが得手だ。そうした芽生えといえなくもない。（2014/07/25 記）



居間に落ち着いてから、母親は木製の積み木をテーブルの上に置いた。そしてくほら、見て、ペピ。タワーをを作ってご覧と彼を促す。彼女は2つの積み木を重ねた。そしてペピも何らためらいもなしに瞬時にそれを真似た。母親は手を叩いて褒めた。くうん、よくやった。賢い子だこと！>と言う。それからすぐに彼も大きな笑顔をつくり、母親を真似て両手を叩いてみせた。いかにもくそれ、ぼくだって出来るもん！>と言わんばかりに…。母親はタワーを2つ以上の積み木を使って作ろうとした。だが、ペピは手を振り回し、それを壊してしまう。母親の指示を無視し、たまたま身近にあったテレビとかラジオの方に気が奪われる。彼は数歩進めて、それらに手を伸ばした。彼がそのつまみをひねってチャンネルを回す動作をしているのを認めた。いかにも訳知り顔である。おそらく彼はそこからいつもの大好きな‘音noise’が出てくるのを聞きたかったのだろう。やがて彼は積み木に戻ってきた。



そこにたまたま電話の鳴る音がどこか部屋の外で聞えた。ペピは耳を傾けている。何が起きているのかと聞き耳を立てていた。そこで母親は、くペピにも電話機があるわね>と言って、おもちゃの電話機を取ってきてあげた。そして電話機での会話をやって見せた。くハロー、ハロー！こちらはMrs. Pが応答しております。ええ、ええ、ペピはおりますよ。ほらね…>といった具合に…。彼も俄然その気になって、その電話機の線に手を伸ばし、まるで自分の番だと言わんばかりにそれを引っ張った。そして実際のところ、ペピは受話器を自分の耳に当てたのである！そして母親に再び電話機での会話を続けるように促す。そのようにして電話遊びをまるっきり好奇心のかたまりになって、しっかり嬉々として続行した。

ここで彼は、父親が廊下でハンマーを使ってなにやらトントンと修理の仕事をしているらしい音を耳にした。そこで父親が何しているのかを見に行こうとする。扉へ向かう。母親は扉を開けてやる。すると彼は急いで父親の側へと近づく。彼は父親と同じことをしたがついていたんだらうが、あまり彼が近くに寄り過ぎたので、父親がく近づかないで…>と彼に注意を促した。ペピはそれにはあまり頓着しないふ

うで執拗に父親の手許を覗き込んで見入っていた。母親はちょっとウッフフと含み笑いをし、オモチャのスクーターを持ってきた。ペピを抱きあげ、その上に立たせてからゆっくりとそれを動かした。一方ペピは運転席のハンドルを両手で掴み、ご機嫌で愛嬌のある笑顔をしている。母親は私に言う。＜想像してみて！クリスマスの間中、こんなふうに廊下でペピをスクーターに乗せては行ったり来たりをやっていたんだから・・・＞と言う。われわれは大いに笑った。その後、直にJ. は図書館に行く用事があるとかで出掛けてしまう。ペピはその後を追う。階段の上のところで立ち止まり、何やら考え深げに父親が階下へ降りてゆく足音に耳を澄ませている。彼の心の内で消えていなくなる父親の姿を追っていたのだろう。

バスルームで、彼が新しい遊びを‘発見’したのを認めた。トイレのペーパーだ！勿論母親はそれをやめさせようと遮る。＜ダメ、ダメ、ペピ。ダメよ＞と彼に注意をする。だが実際のところ彼女は決然とした介入をしないままであった。つまり力づくで彼を止めさせることはしない。ペピはただ悪戯っぽい笑みを浮かべて、時には興奮した甲高い叫びをあげながら、トイレのペーパーを引っ張る。そこですぐに彼の足元にはペーパーの山が出来てしまった。母親は急いでそれを片付けてしまう。＜もしも、お父さんが帰宅したら、この紙をまず使ってよね・・・あなたの息子がしたんだからねって言うわよ。他所の子がしたわけじゃないんだから・・・あなたの息子だよ・・・ってね＞と言う。それから、どうにかついには彼を両腕に抱き上げてマットレスに彼を戻し、中断していたこと、つまりペピにパジャマを着せるのを終えた。……

■第38回目の訪問 ペピ; 1年1ヶ月 & 3週目 1975/02/06 (4:35-7:00pm)

この日、嬉しくももう一人訪問客がいた。それはガーナからの女の子で、私たちはペピが生後5ヶ月目に一度出会っている。彼女はロンドンの或る秘書コースに在籍しており、ごく最近ガーナに帰国してきたばかりであった。われわれはキッチンで挨拶をした。ペピは彼女の膝の上に抱かれて、穏やかにちんまりと収まっていた。そこでその女の子C. からMrs. Pにガーナからのおみやげ物が手渡された。Mrs. Pがその小包みを開けると、そこにはまず最初に小さな子ども用の夏のジャケットがあった。青い色である。それはJ. (ペピの父親)のお気に入りである。母親はとっても喜んで、ペピにそれを着せようとした。幸せな興奮が笑いとともにキッチンに拡がった。勿論ペピは何がどうだか事態をよくは了解していないにしろ、それでも幸せそうであるのには間違いない。それから、母親は小さな箱を開けた。そこには彼女のための耳飾りがあった。それはなかなかの工芸品であった。そこで彼女は大喜びだった。それを耳にして、＜見て、見て！ママの素敵なお耳飾りよ。いいでしょ＞とペピに見せた。徐々に彼の興奮は最高潮となり、はしゃいだ甲高い笑いを張り上げた、それは幾分コケテッシュでもあった。彼は時折私の方に歩み寄って、両腕を私の膝の上に置き、顔を輝かせて私を下から覗き込む。彼の動作のことごとくがあまりにも愛らしいものだから、そこに居る誰しもの笑いを誘った。実際のところ、彼は3人の女性たちに取り囲まれていたわけで、私はふと、どうやらペピはその内の誰に注意を向けたいのやらと悩んでいるといったふうには感じられた。母親は、ペピにとって大好きな人ばかりがこんなに揃って一緒だから、どうにも嬉しくてハッピーでたまらないんだということを私に語った。そのとおりだろう！

母親はペピのための夕食を用意していた。彼はキッチンをあちこちうろついていたが、隅の方に行って、そこにあった「ちり取りとブラシ」とを手に取った。母親は「あらまあ、又なの？この子ったら、‘ゴミ収集人 dustman’をやろうってわけなの」と私に語る。ペピはゴミバケツ dustbin の蓋を取り、その中を覗いた。母親はクスクス笑い、蓋を戻した。なぜゴミバケツがそんなに彼にとって魅了されるのか分からないといったふうに頭を捻りながら、「あーあ。ちょっと、頭がおかしいのかもね・・・」と彼をいくらか揶揄する。母親は、私がC. に背丈が随分高くなったわねと話しているのを耳にして、それって実は彼女が履いている‘プラットフォーム・シューズ’のせいだと話す。もしも自分もそれを履いたら、うんと背が高く見えるわと言って、履かせてもらう。事実、その通りだった。「ほらね、ペピ」と言う。ペピはまるで手の届かない高さにある母親の顔を見上げた。それから、母親は、その12サイズの靴をペピに履かせた。自然皆は爆笑した。彼があまりに小さく、その大きな靴の中からだごとすっぽりと入ってしまいそうに見えたからだが・・・。ペピは事態がよく呑み込めない。けれどもちょっと不思議そうな顔をして、ただ微笑んでいた。

彼のお茶が用意されたところで、母親はペピをC. に食べ物とスプーンと一緒に手渡した。C. は小さな妹やら弟たちがいて、日頃小さい子の世話には慣れているので、ペピのお世話を喜んだ。しかし私は、彼女がペピに食べ物を与えているのを観察している間に面白い妙なことに気づいた。彼女が私に【タヴィ】での研修を愉しんでいますかと尋ねてくれたので、私も彼女に、そちらの秘書コースはいかがですかと同様な質問をした。さらにガーナで彼女の年下の弟が突然死したことに触れた。彼女はとても熱心にその話を私にしたがった。それで単純にペピに食べ物を与える手を折々に休めてしまう。そして私とお喋りに没頭したわけで、それでその結果、食べ物が乗ったスプーンはペピの目の前で立ちどまる。必要以上に長く・・・それは日頃ペピが経験しないことであった。だがなぜかそれで焦れたふうには全然ならなかった。その代わり彼は自分のからだを前倒しにして、そのスプーンの方へと首を伸ばした。口を大きく開けて・・・私はこうした外界の事情に適應する彼の能力に感嘆する思いで眺めていた。彼はどういう感情をも顔にしなかった。だが私の見る限り、あまりにも頻繁にスプーンが口に運ばれてこないものだから、彼が苛立ったとしても全然おかしくなかった。それで結局ついに彼はもうその‘潰したリング’を欲しがらなくなってしまう。C. は母親に「ペピはお腹空いてないみたい・・・」と言う。母親は、「だったら、無理に食べさせなくてもいいのよ」と返答した。C. がペピに、もう欲しくないのねとダメ押しし、それから彼に《リビナ》の飲み物を与えた。そして抱いていた彼を床へと降ろした。すぐさまペピはそのベビーカップを床にゴロンと落とした。いかにもどうでもいいやって無頓着に・・・それから気を紛らわすためか、部屋の隅へと歩いて行った。そこで戸棚を開け、そしてそこに収納されていた陶器類を触り始めた。母親は、彼がまさにそこから皿を引っ張り出して落としたりする寸前に押しとどめた。ペピはゴミバケツへと移動し、その蓋を開け、そしてそれを持ち上げて、バケツを運ぼうとした。それがおかしいことにまるっきり確かに‘ゴミ収集人’がやるのとそっくりなぐさである。‘ゴミ収集人’になり切った振りをしているのだろうか。母親は「あーあ、ちょっとね、頭がおかしいかな・・・」と言って笑う。C. も私も・・・。

母親は、やかんでお湯を沸かし始めた。皆でコーヒーを飲みましょうねと言う。それから洗濯物を干しに掛かった。一方で、「可哀想に・・・お父さんがね」と話し始めた。夜勤明けなのに叩き起こされて、

Ja. の老いた父親が鍵を置き忘れて外出したので部屋に入れなくなるという事態となり、そこで彼に電話してきて、Ja. のフラットまでスペアの鍵を取りに行ってくれないかと頼まれたんだとか。さて、ここでちょうど頃合良くお茶の準備ができたところにJ. が戻ってきた。ペピは馴染みのある父親の顔をいとも気安そうにして見上げた。C.と私にハローと挨拶をしたあと、彼はキッチンを出て行った。そしてその少し後、ペピは廊下へ出て、父親がどこへ行っちゃったのかと探そうとする。だがすぐ戻ってきた。母親は、くほらね、あの子は今ではもう家中のこと、すっかり分かっているってわけ・・・>と私に語る。さてここでペピは再びテーブルの上に置かれてあった新しい夏服に近寄り、それを手にし、まるで私に見せびらかすふうにくいいでしょ？>と言わんばかりに見せた。そこで私もくほんと、可愛いわね。とってもペピに似合いそうね・・・>と言って、それをテーブルへと戻した。ペピはひどくご機嫌なムードとなり、両手を私の膝の上に置き、私の顔を見上げ、ちょっと媚を含んだ、誘うかのような(!)笑みを浮かべた。それから彼は、私が手に持っていたマグカップに注意を向け、それを掴む。その中身を覗くかのように背のびした。そして真面目な、しかも断固とした感じで、そのコーヒーを自分も飲もうとする。そこで、私はカップをしっかりと手に持ち構え、もうほとんどコーヒーは残ってはいなかったのだが、やんわりとくコーヒーはペピには良くないわ>と言って、カップをテーブルの脇へと戻した。

ペピは父親が居る居間へと向かう。私も彼の後を追う。そして彼がピアノの鍵盤を叩いているのを認めた。父親は肘掛椅子に座り、新聞を読んでいた。ペピはTVへと移動し、その表面を何度か軽くタッピングした。それからそのつまみを回す。勿論映像が出てくることを期待してだが。それから彼は傍らに大きなガラスの瓶が置いてあるのを認め、それを両手で持ち上げた。それから結構重たいのに、その瓶を引きずってゆく。私は、決然としてやりたいことをやろうとする、この‘若者’に驚嘆した！Mr. Pと私とはそうした彼を静かに見守っていた。私はペピの真意を測りかねて、何をどうしたいから彼はこんな大変な労働を敢えてやろうとしているのかと訝った。だが、結局その答えは曖昧のままだった。彼は今や部屋の別の隅へと移動しており、そこで彼は戸棚の扉のノブを引っ張った。中を覗いて、そこにあった物をいくらか触っていたが、それらを引っ張り出すには至らず、それから唯その扉を閉めた。するとこの時点で、突如何やら閃いたものがあるらしい。彼は直感的にこれは面白いぞと分かったみたいで、扉を開けた。大きく開け放し、それから再び位置を変えて、今度は両手でその扉を閉めた。それからこの扉の開け閉めという‘ゲーム’を飽くことなく繰り返した。彼がこれを何回やったかについては覚えがないが、とにかくそれは彼にとって尽きることはない愉快的なことだったようだ。ここで父親のMr. Pは、くこの子は、こうやって決して飽きるってことがないんだよなあー>とボソッと呟いた。

やがてペピはキッチンへとやってきた。そこでは母親とC. とがカレー料理に忙しかった。大きな戸棚が開いていたので、彼はそこへまっすぐ歩いてゆき、そしてその中の物をあれこれ物色し始めた。(その中にはたくさんの食糧が保存されており、その中の一つがビスケットの缶なのであった。)母親は彼に、くあら、ちょうどカレー粉が要るんだったのよ>と言う。ところがちょうどその時ペピが手にしていたのを見て、彼女は笑い、くあら、違うわ。ペピ、それは魚の缶詰じゃないのよ>と言う。ペピは熱心にそれを母親に手渡そうとする。母親は、その缶詰のラベルに魚の絵があるのを彼に示して見せたが、ペピは大して

それには耳を貸したふうではない。再び戸棚の中へと興味を戻した。<それぞれ、それがカレー粉よ。有難うさんね>と言って、彼女は戸棚の扉を閉めた。そして今度はペピの戸棚に向ける関心を逸らすために、彼女は‘シャボン玉’を彼に示した。<ほら、ペピ。チズコがおまえさんに素敵なシャボン玉をくれたわよ>と言う。私も彼女の示唆するところには異議もなかったので、ペピに<ほらほら、すてきでしょ。ペピ。捕まえてご覧！>と言う。だが‘シャボン玉’は彼にとってどうもわけの分からないシロモノだったらしく、彼はただびっくりして、ジッと黙ったまま動かない。一方で大人たちは大はしゃぎで、<ほらほら、見て。大きいでしょ。あらあら、消えちゃた、残念・・・>とやら、あるいは<ほら、こっち。シャボン玉を捕まえて・・・>とか・・・。ペピか大人か、どっちがこの‘シャボン玉遊び’により興じたものか分からないほど・・・。徐々に彼はそのシャボン玉がどこから来るのかをようやく突き止めた。つまりは私が手にしている小さな瓶なのであった。そこで彼は手を伸ばして、それを掴み取り、中を覗き込んだ。私はどうやってシャボン玉を吹くのかを彼に示した。まず最初にリングをシャボン玉液に浸し、それを彼の口の近くに持ってゆき、<息を吹きかけよ。吹いてご覧、ペピ>と言う。だが、彼には「吹く」ことの意味がよく分からない。事実彼は私の指示どおりにしたのだが、その息 puffs は充分ではなかった。それでシャボン玉にはならなかった。それからしばらくして私は、シャボン玉ゲームはもう十分したと思ったので止め、その瓶の蓋をきっちり閉めてから、ペピに手渡した。それを手に持って、彼は父親の様子を気にして、居間へと向かった。するとまたしばらくして、彼はキッチンに戻ってきた。彼は水屋の下の戸棚へと向かった。そこに何かがあるのか彼は知っていた。ソースパンである！その内の一番大きいのに目を付けた。その中には小さな蓋が2個あった。それから床に座り、その蓋を取り出し、またそれをまた元へ戻し、ソースパンに蓋するというのを繰り返した。それは実に生真面目に続行された。だが彼の意図するものが、ソースパンに蓋をするということだったのかは定かではない。とにもかくにもその蓋が大きなソースパンには小さすぎたのだから・・・。母親は気を利かして彼に大きめの蓋を手渡した。ちょっと手間取ったが、彼はその大きなソースパンにどうにかその蓋をし終えた。それからその後、彼は立ち上がり、そのソースパンを引きずって、父親の居る居間へと向かった。それからしばらくしてまたもや彼はキッチンに戻ってきたが、ソースパンを尚も引きずっていた。それから彼はゴミ入れのポリバケツへと向かい、その中を1度2度覗き込む。そしてしばらくして、ガスコンロの近くで料理をしているC. に注意を向けた。そして彼女の顔を見上げて、彼は何かを彼女に‘話した’。それは実にかなり長いすばらしい‘スピーチ’であったもので、誰もがそれに注目した。彼には何かしらわれわれに伝えんとするものがあつたらしい。生真面目そのものであった。一息を付いたあとで、また長い‘スピーチ’が続いた。それはおそらく、C. がガスコンロの火に掛かっているソースパンから決して目を離さないようにとか、時にはソースパンの中のカレーを掻き回し、焦げ付かないようにしなきゃねとか、そんな注意事項なのであつたろう。誰もがこの‘小さな説教師’に感銘を覚えた。勿論彼の‘語り’がいかなるものであつたのか完全に理解できたとは言えないにしろ・・・。このすぐ後で、母親は彼が隅で座り込んで、指吸いをしているのに気づいた。<あらまあ、そろそろベッドに入るサインだわね・・・>と言って、彼の入浴の支度をしに、バスルームへと向かった。

その後しばらくして、母親はペピをバスルームへと連れて行った。そこで彼はまっすぐに水洗トイレへと歩いていった。彼はその蓋を手に取り、開けた。それからその中を好奇のまなざしで熱心に覗き込んだ。

彼はその場にしばらく居たが、それからトイレのブラシへと手が伸びた。母親はクスクス笑いながら、それが彼の新しい‘お気に入り’なのだと私に説明した。びっくりしたことに、彼はそのブラシを手にとって、トイレの中に差し入れ、グジャグジャと掻き回すしぐさをしたのであった。そこで私が、彼はほんとうに母親を真似てトイレの清掃をしているつもりなのかと問うと、彼女は自分がトイレの清掃をするところをペピが見たことはないはずだから、彼がトイレのブラシの使い方を知っているというのも単なる偶然の一致でしかないと請合った。母親はトイレの水を流す。ペピはその水の流れをしばらく凝視していた。水が流れてしまうまで…。そして母親はブラシを元の場所へと戻した。そしてトイレに蓋をした。私はそこに腰を掛けた。なぜならそれがいつもバスルームで観察するときの私の定位置なのであったから…。しかし私は内心ちょっと気が咎めた。なぜなら彼はトイレを独り占めしたがつているみたいだったし、尚も探索したがつているのに、私がそこに陣取っているがために、それが出来ないというわけであったから…。

それから彼はバスタブへと向かった。そのバスタブの隅にはたくさんの物があつた。シャンプー液とか、泡立つ入浴剤とか、他にも彼の入浴の際に使うオモチャ類である。彼は体を前のめりにして、それらに手を伸ばした。彼の考えでは、それらはすべてバスタブの中に入れちゃうべきなのであった。それらを手で横倒しにして、バスタブの中へ落っこそうと企む。母親はこれに手を貸した。そうしてから、お湯の中でそれらのものが浮いているのをペピが眺めているところで、母親は彼の衣類を脱がした(オムツも…)。それから湯の中に浸かり、ペピはそのバスタブの中の‘お仲間たち’と一緒にいる。彼は満足げであった。浮いているそれらを一つつつ追掛け、手に捕まえんとする。そしてお湯を掻き回したり、水飛沫をあげたりもした。そこでしばらくして母親は彼を抱きあげて、バスタブから出した。だが、彼はタオルで包まれながら、抵抗を示し、そして苛立ったぐずり声をあげた。間もなく母親が「いないいないばあー」の遊びに彼を誘導したので、彼はなんとかご機嫌を取り戻した。それから彼は母親の腕から逃れて、裸ん坊のまま急いで私の方へ這ってきた。彼は私のロングスカートの裾を手で掴んで、ちょっと愛想するような笑みを私に投げかけて立ち上がった。母親が、<チズコのスカートにオシッコを引っ掛けちゃダメよ。チズコは喜ばないわよ>と言う。われわれは爆笑した。そこで彼がトイレ・ブラシの方へ手を伸ばそうとしたので、<だめ、ペピ。もうトイレ・ブラシはもう今日はおしまいよ>と母親が彼に言う。そしてそれをトイレの後ろへと隠してしまう。ちょっとの間四苦八苦しながら、どうにか彼に服を着せ終わった。パジャマのボタンは途中までだったが…。そして母親はバスルームを去る段で、ペピに電燈を消させた。彼はその紐をなんとか引っ張れたようだ。そして、それが私のお暇をしなくちゃならない時刻でもあった。

■第43回目の訪問 ペピ; 1年4ヶ月目 1975/04/10 (5:35-7:30pm)

私が訪れると、Mr. & Mrs. Pはまだ買い物から戻っておらず、私は玄関口で彼らの帰りを20分以上待たねばならなかった。彼らがようやく帰宅したとき、ペピはと見ると、車の後部席で深い眠りにあつた。すっかりたびれ果てている。母親は彼の名前を何度かやさしく呼んだので、彼は徐々に目を開け始め、母親の顔を見上げ、そしてそれから傍らにいた私をもチラッと一瞥した。この時点で彼はやや内閉的な状態であり、感情を表出することはしなかった。おそらく眠気のせいで、どんなことにも煩わされる余裕がなかったのだろう。母親は彼を腕に抱きかかえ、そしてフラットの玄関から中へ入った。

われわれが最後の階段に辿り着いたとき、母親はペピを降ろした。おそらく彼が少し生氣を取り戻したように感じられ、階段を上らせるということをやらせてみようと思っただろう。彼にとってもそれは愉快なことだろうから。彼にそれだけのエネルギーがあればの話だが…。結局のところ、彼はそれをやり遂げ、そこで体勢を立て直し、階段の下のわれわれが上ってくるのを眺めていた。そこで彼はまったく愛らしい‘スピーチ’をした。まったくのところ、彼は何ごとかについて語っていたようなのだが、残念ながらわれわれの理解には及ばなかった。それからその場所で、彼はたまたま足元に‘ガラガラ’が落ちているのを見つけた。彼は座り込んで、静かにそれで遊び始めた。母親はキッチンへと向かい、ペピのお茶の用意に取り掛かり始めた。私は階段の中ほどに立って、彼を眺めていた。すると彼は後ろを振り返って、階段の方を見下ろし、それから私の顔をも見た。私は彼の心の内に或る種の強い誘惑がうごめくのを察した。つまりその手にしている‘ガラガラ’を階段へと放り投げるべきか否かということである。そこで、彼は‘どうやら私にどうしようか、どうしたらいいかを尋ねた模様であった。私は、<放り投げちゃったら、もう一回取り戻すのって大変よ>と彼に伝える。だが、彼はどうしても事の顛末を知りたいと思ったようだ。彼は手を離し、そのガラガラを階段の下へと投げやった。ところが幾らか彼には迷いがあつたらしく、勢いが無い。そのせいか、ガラガラは2段下に転がっただけであった。ペピはそれをしばらくジッと凝視していたが、それからそれを指さして、私に‘*ねえ、それ取ってよね*’といったふうな顔つきで私の方を見た。そこで私はそれを手に取って彼に渡した。彼はそれを受け取り、何やら神妙に考え込んでいた。一方で私は階段を上がり、彼の傍らを通り過ぎて、廊下の彼からちょっと離れたところで見えていたのだが。しばらくの‘冥想’の後、彼はそのガラガラを放り投げることによりやく決断したふうであった。そこで今度はそのガラガラは階段の下まで勢いよく転がって行った。彼はじっとおとなしく、ただぼんやりと彼の手から遠く離れて行ってしまった物体を凝視していた。それからしばらくして、彼の注目は別の何かへ逸れたようだ。どうやら彼は父親がやって来るのを待っているようなふうに見受けられた。そのまま彼は耳を澄ましていた。だが、何も聞えない。(Mr. Pが新聞を買いに出掛けたのを知らなかったのも、私も彼がちっともやって来ないので、ちょっと訝っていたのだが…) ペピは、結局のところガラガラ(もしくはお父さん)を取り戻すのを諦め、母親がいると知っているキッチンの方向へと廊下を歩いて行った。

ペピはキッチンの中を、ただうろちょろしていた。当て所ない感じで、特に何か探しているふうでもなかった。が、テーブルの上にビスケットの缶を見つけ、彼は自分が何を探していたのかに気づいたのであった。しかし、妙なことに、この時ばかりは、それにまっすぐに飛びついてゆくには彼はちょっと‘お行儀がよい’みたいだった。彼はテーブルに1歩近付いて、私の顔を悪戯っぽい笑みを浮かべて見た。母親は、<おやおや、何してるのかな、分かっちゃってるわよ>と言う。ペピはクスクスと笑い、それ以上はことを進めないままに、母親が梨を剥いているキッチンの奥の隅へと向かった。それからすぐ後、母親は彼を抱き上げ、洗濯機の上に彼を座らせた。そして彼の靴を脱がそうとした。その際に彼を立たせたものだから、彼が母親よりもずうっと高くなった。彼は神妙に考え深いまなざしで母親を見下ろしていた。彼はこの日頃‘見慣れない母親’に戸惑ったのかも知れない。母親は彼を再び洗濯機の上に座らせた。そして私に向かって、彼が百貨店で他の何人かの子どもらと一緒にどんなふうだったかをお喋りし始めた。ペピはごくスムーズに彼らと打解け、そして一緒にオモチャのあるコーナーで一緒に走り回ったり、床

をガンガン飛び跳ねたりといったふうだったんだとか。母親がどんなにペピの成長を誇りに思い喜んでるかということを知ったかのように、母親のお喋りをその顔を眺めながら、いかにも受容的な態度でおとなしく聴き入っていた。

母親はペピのお茶の支度にもう一つ或る別のことをしなくちゃと思立ち、彼を洗濯機の上に座らせたままキッチンを去ろうとした。母親がそのペピのハイチェアのテーブルを彼の部屋へ運ぶのにキッチンを去ろうとした時点で、ペピは自分の位置がちょっと不安に覚えたみたいで、ちょっとぐずり声をあげた。おそらく母親にここから降ろしてよとお願いしているようだった。それで母親はそのとおりにしてやった。そこで皆一緒に彼の部屋へと向かった。母親は彼の部屋の壁紙を張替えているところだと語る。彼女が新しいのを購入したのがどうも父親のJ.には気に入らず、それで他のを見つけなくてはならないということになっていて、でも尚しばらくはこのままなんだそう。私は、それがどんなに家庭内の日常的な瑣末なことであっても、Mrs. Pが夫のMr.Pの意見やら感情やらをととても重視しているのにはとても感銘を覚えた。

さて、その一方でペピはハイチェアに座らせられ、プラスチック製の胸当てをしていた。母親はお皿を彼の前に置き、彼を一人にした。そしてわれわれのお茶を用意するのにキッチンへと戻った。彼はおとなしく食べ物に取り組んでいた。まずはトーストの一片を手に取り、一齧りした。それが固いと悟った。私が見てもそれはちょっと焦げていた。それでなぜ母親がそれに気づかなかったのかと訝しんだ。なぜならその日、彼女が殊更不注意だとか他のことに気を奪われているとは思えなかったから。ペピはそれを皿に戻し、代わりに梨の一切れを手にした。どうやらそれには満足したようで、梨を食べ尽くした。それから彼は一切れのオレンジへと移る。口の中でモグモグしていたが、その皮を口から取り出して皿に戻した。それからもう一切れのオレンジへと移った。私は、その彼の行儀作法の良さと、そのいかにも落ち着き払った振る舞いには大いに感動した。彼は私がすぐ傍らにいるということには殆ど意識していないようだった。実際のところ彼は新しく張られた壁紙に向かっていて。そこで彼はその明るい黄色のカラーに魅了させられていたのだったかもしれない。とにかく彼はとてもお行儀よく、泰然としたふうにひたすら一人で食事をしていて。

母親がキッチンから戻ってきて、私にお茶を勧めてくれた。そしてペピのテーブルに《リビナ》の入ったカップを置いた。<さてと、皆で一緒にお茶をいしましょう。>と言いながら。ペピはオレンジの皮を口から出して、それを母親へと手渡した。彼女はそこにはオレンジがまだ残っていたのを見て、自分の口へと入れ、食べた。ペピはそれから彼女にトーストを与えた。<トースト、要らないの？>と尋ねて、それから彼女はそれを受け取り、自分で食べた。ペピは両手でカップを手にした。それは蓋の付いている赤ちゃん用のカップではなく、普通のものであった。それでペピがどうするかと私は興味津々だった。結局のところ、彼はうまい具合に飲んだ。勿論、いくら《リビナ》はこぼれて、彼のプラスチック製の胸当てにだらだらと流れはしたものの。私は物事が実にうまく行っていると安堵した。ペピは今や新しく自分用の個室が与えられたこともあり、自分を取り巻く環境に実に安心しきって納まっている様子が覗かれた。

ペピは棚の上の何かを指さした。母親はどれなのかよく要領を得なかった。ペピ自身もよく分かっていなかったのだろうと思う。でも結局のところ、‘象さん’が欲しいということに決めたようだ。母親はそれをテーブルの上に置いた。〈象さんも飲み物が欲しいんだって・・・〉と言いながら・・・そして彼女はそれに飲み物を与えるふりをした。ペピはこれには嬉しそうに反応し、彼女に微笑を返した。それから彼自身がカップを手に取り、《リビナ》を飲んだ。そのちょっと後、私は床にスプーンを落としてしまう。その物音に気づき、すぐさま彼は振り向いて私の方を見た。私は自分の無作法に困惑していた。おそらく顔を赤らめ、ちょっとまごついて妙な笑いを浮かべていたのだろう。ペピはクスクスと含み笑いをし、私の方を愛嬌のある笑顔で眺めていた。それからまた彼は自分の食事へと戻った。しかしもうあまり気乗りしないみたいで、一片のトーストを手にして、それはあまりおいしくも何ともないということを既に知っていたから、それをポトンと床に落とした。この無作法を目にして、私は彼に悪い影響を与えたかなと思ひ、ちょっとうたえた。とにもかくにも母親はこの時点で、ペピは十分な食事をいただいたということにし、片付け始めた。彼の胸当てをも外した。ペピもテーブルから降りる算段をしていた。手で象さんやらカップをどけた。それらは床に落ちた。〈よし、もう終わったからね。行っちゃっていいよ・・・〉と言わんばかりであった。

この時点で、電話のベルの鳴る音が聞えた。そこで母親がペピをハイチェアから降ろして、床に立たせた。そして電話に出るのにキッチンへと向かう。ちょっと間を置いて、彼は象さんを掴み取り、それを手に持って、私に手渡しに来た。恰も〈これ、持っててよ〉と言うふうに・・・それから廊下へと歩いてゆきかけたが、私が腰掛けていた長椅子にレゴがあるのを見つけて、それに興味を覚えた。彼は歩みを止めて、それで遊び始めた。それからそのレゴの一つを手にして、私にくれた。それからキッチンへと歩いていった。そこでは母親がやや興奮ぎみに受話器越しにお喋りをしていた。ペピは戻ってきた。扉の後ろに半分からだを隠した恰好で、それから「いないいないばあー」といったふうに飛び出し、恥らうふうな笑みを浮かべて私をチラッと眺め遣った。それから彼はレゴへと向かった。再び彼は私に一つレゴをくれた。が、それを私から取り上げる。それを手にジッと見入っていじくっていたが、それからゆっくりと床に落として、そのまま隅へと行ってしまふ。それからまた彼は私の近くに寄ってきた。床に、私の足元の辺りに、お茶の茶碗があるのを認め、スプーンを掴んで、それを私に手渡した。それからカップ、そしてそれから皿をも、次から次へと彼は私に手渡した。ごくごく真面目な顔付きで、まさに〈これ、ちゃんと大事に保管しておいてよね〉と言わんばかりに・・・そこで私はもっと安全なところ(棚の上に)それらを置いた。

母親がキッチンから戻って、今さっきの長距離電話を話題にした。それは彼女の友人の一人からで、ちょうど赤ちゃんを出産したばかりだという話だったそう。〈ほんと嬉しいわ。とっても素敵よね。ペピ、D.のこと覚えるでしょ。彼に妹の赤ちゃんが出来たんですってよ〉と、彼女は彼に嬉しいニュースを伝えた。それから彼女は床に座り、〈積み木して遊ぼね・・・〉と言って、タワーを作り始めた。そしてそれを腕でそれを庇う恰好をして見せて、〈お願いよ。どうか、倒さないでよね〉と彼に言う。ペピはクスクス笑っている。それからどうにかその積み木のタワー目掛けて一突きした。するとそれは崩れた。それからペピは積み木を一個掴んだ。それからもう一個・・・彼はタワーを作ろうとしている。そして4個の積み木を積み上げた。母親はひどく喜んだ。〈まあまあ、やったじゃないの〉と言って、手を叩いて褒めた。

ペピもまた熱心に手を叩いた。いかにも自画自賛といった体である。そして私の方を振り向いて、私が手を叩いていないのを見て、まるで咎めるようにちょっと顔をしかめた。いかにも彼の偉大なる達成に対しての私の無関心はけしからんと咎め立てしてるかのような目つきで私を見る。彼は積み木のタワーに手を触れた。するとそれは崩れた。母親はもう一度積んでご覧と彼を励ました。それでもう一度やってみるが、うまくはいかなかった。それでも二度目にはどうにか案外すんなり簡単に出来た。それで興奮したふうに、はしゃいでいかにも得意然として手を叩いた。そして私が手を叩いていないのをいくらか首を傾げるふうに訝しげに見遣った。

母親はプラスチック製の長い手をした‘お猿さん’を手にしていて、それを積み木の塔にぶら下げた。次から次へと…。ペピは、その一方で、それらを次々に掴みとってしまう。そこで、これが彼らの間で面白いゲームとなり、たくさんの笑い声やらクスクスやらがあがった。その少し後で、玩具をしまう箱が幾つかある部屋の隅へとペピは歩こうとしていて、たまたま母親の手の届くところに来た。そのとき母親がくペピ、抱っこさせて(Let me have a cuddle)…。>と言う。そして彼を腕に抱えて、キスをしようとした。ところが彼はこれにはまったく反応せず、母親の腕から逃れようとする。それで結局のところ、彼は母親の腕から抜け出して、玩具の箱へと這っていってしまう。彼はそこにしばらく居たが、それから周りをうろついて物色し始める。彼は一個の缶に目を付けた。それはそもそもお猿さんたちを入れてあったものだが、この時点では「空」であった。そしてそれを両腕に抱えて、床に座り込んだ。一方、母親は何やら新しいゲームを考案しているらしい。幾つものカラフルな色のプラスチックの輪があり、その真ん中にお猿さんがいた。そこでそれを取り外したり、もしくはお猿さんをそこに嵌めたりするというのが愉快的なゲームになるのではないかと思いついた。母親は、ペピの注意を引こうとして、彼にこの新しいゲームを教えようとした。しかし、ペピはそれどころではない。自分のことで精一杯であり、母親の方には一顧だにしない。そこで母親が、<あら、いいわよ。私、自分でするから…。>と言って、それほど面白そうでもないふうに、彼女はその遊びに取り組んでゆく。彼がこの時点でやっていたのは、小さな積み木を缶の中へと落とすことであった、それからそれを拾い上げる。その繰り返しにすっかり没頭し切っていた。もの凄い集中力であり、また情緒的にもかなり熱が入っていた。

ここで母親は、ペピを喜ばず別の手を考えた。<いいわ、本を読んでやろうね。おまえさんのお気に入りの本だよ>と言って、それを取って来た。幾らか此の度はどうにか彼の注意を引くことに成功した。彼は母親が手にしている本の絵に見入り、一緒になってページを繰る。<ウワー、これはきれいな花だわねえ。ペピ、匂いを嗅いでごらん…。>と言う。するとペピはそのページに鼻をくっつけて、ごくごく真面目に匂いを嗅ぐふりをした。母親が<わあー、ほら、何と可愛い仔猫ちゃんなの。ハロー、可愛い仔猫ちゃん！ペピ、ほらね、キスをしてあげなさい…。>と言うと、再びペピはそのページに顔をくっつけて、口をモグモグとうごめかす…。しばらくしてから、彼はまっすぐにその本を持って私のところにやってきて、それを私に手渡した。そこで私はそれを膝の上に置いた。彼は私の顔を見上げながら、<ほらね、読んでよ>といったふうな顔をした。私が何らそれらしき行動を起こさなかったもので、ペピはその絵を見て、私の顔を見て、ページを次から次へと繰りながら、何やらゴジョゴジョと口の中で言っている。恰も<ほら、

見せてあげるよ。見て見て、これでしょ、これもね。ほらね・・・>といった感じで、それら絵についてありったけの持てる知識と理解とを私に伝えようとしてくれていた。ペピは「ロッキング・ホース(揺り木馬)」の近くに行った。そこで母親が彼に、<ほら、おまえさんのとってもすてきなボブちゃんだね。ほらほら、ボブにキス、キスしてごらん>とやさしく誘った。ペピは、顔をそのボブの頭に近づけて、彼にキスをした。<なんてやさしいんでしょ。おいで、ママにもキスしてちょうだい>と彼女は腕を彼の方へと伸ばした。ペピは彼女の方をチラッと見たが、母親の方へと歩みを進めようとはしない。ペピはオモチャのスクーターを手に握って、それから扉の方へとそれを引きずって行った。突然この時点で何やら思い出したふうだった。悪戯っぽい笑みを顔に浮かべて、くるくと回転し始めた。それがどうやら最近の彼のお気に入りの‘気ちがいじみた遊び’というわけらしい。そんなふうに眩暈を起こすことが彼を興奮させるようであった。この時点で、Mr. Pが部屋の中に顔を覗かせた。Mrs. Pは、<あらまあ、どこかに姿を隠したのかと思ったわ。居たのね・・・>と言う。彼は、ウムとひと言応えて、ペピにハロー！と言う。ペピは父親をじっと見上げていた。どこか打解けないふうな、注意深く相手を観察するまなざしである。ちょっとだけお愛想の笑みを浮かべたけれども・・・。母親は今さっきペピがやっていたことを父親に語り、<もう、いかれちゃってるわね！>とペピを揶揄したものだから、皆が一斉に笑った。父親はまた姿を消した。ペピが今度は近くの棚から「Donald Duck」を取り出す。そのお腹を押して、何やらぎゃあぎゃあと話しをさせた。それからさらに何か面白いものはないかと物色して歩く。偶然、彼は床に横になっていた母親のところに近付いた。そこで彼女は彼を捕まえて、腕に抱え込もうとした。勿論キスするためだが。しかし彼はその腕から逃れて、母親のからだの上に乗っかる。彼はそれを踏み台にして母親の後ろにあったテーブルに近付こうとしたのだが、彼のからだの重さが自分のからだ(彼女のお腹)には重すぎたために、そこで彼女はほんの少しだけからだの位置を変え、そして彼のからだを両腕に捉えた。彼らはお互いに向き合っていたが、どちらかという積み重なっていた。ペピは母親を何かしら妙な具合に緊張した面持ちで見ている。母親は、<あらまあ、おまえさんは私を潰しちゃっじゃないのさ・・・>と、ちょっと悲鳴を上げた。それから間もなく、ペピは彼のコットに手を伸ばし、コットの真上に天井からぶら下がっているモビールを見上げた。そこで母親は彼を抱き上げ、低い丸椅子を持ってきて、それをコットの傍らに置き、その上にペピを抱き上げて、そこに立たせ、それからモビールをよく眺められるようにした。息を吹きかけ、それをくるくと回らせた。しばらくすると、ペピはその丸椅子から降りたがった。彼はちょっと不安げであった。というのは、その椅子が少々高めであったからだ・・・。しかしながら、いつの間にそうしたスキルを身に付けたものやら、どうにか腰を徐々に屈めて、ゆっくりと片方ずつ足を伸ばして自力で床へと降りることに成功した。母親はこれを見て、ひどく喜んだ。

母親はバスルームへと蛇口のお湯を捻りに部屋を出ていった。それから寝室に行き、ペピの物を取って来て、それからペピの夕食の哺乳瓶用のミルクをあたためにキッチンへ行ったようだった。片やペピはバスルームへと移動し、お湯がバスタブの中に流れるのをジッと眺めていた。そして「白鳥さん」を、たまたま彼の手近にあったものだから、それをヒョイと突き飛ばして、お湯の中へと落とした。それから彼は廊下へと歩いてゆき、しばらく階段の下をジッと眺めていた。だがそれ以上行動を起こすことはしない。もう一歩踏み込めば、階段から落ちてしまうと心得ているふうだった。それでバスルームへと引き返した。

そのしばらく後、母親は彼を捉まえに来た。<ペピ、おまえさんの部屋で服を脱ごうね>と言って、彼の部屋へと連れてゆく。母親は彼のシャツとベストを脱がす。ペピは床に座り込んでいた。そしてたまたま自分で自分のソックスを引っ張って脱いだ。母親がそれを面白がり、もう一つ別のも脱いでごらんと言う。するとペピはそうした。そして面白いことに、ペピはその脱いだソックスをまた履きたがったのである。<あらあら、ほらね、パニーちゃんだって出来るわよ>と、ペピのソックスの片方をパニーに履かせる。そしてそれを彼に示した。だが彼はどうも気が乗らない。無視する恰好で、むしろ自分の足にソックスを履こうと懸命となっていた。それからしばらくして、ペピはどうかオムツ以外のすべての衣類は脱いだわけだが、その時点でまた彼は母親の腕から逃げようとする。まだまだあちこちうろちょろしていた。そこで母親が<ほらね、パニーちゃんがおまえさんの‘カンフー’の寝巻きを着ているわよ。ほらほら・・・ね>と見せて、彼が戻ってくるように誘った。徐々に彼は戻ってきて、それからパニーちゃんの包まれている自分の寝巻きをグイッと掴むや、いかにも邪険にそのぬいぐるみのうさぎさんを放り投げる。恰も<ぼくのだよ！おまえなんかにはあげないんだから・・・あっち行け！>と言わんばかりなのであった。

彼は‘カンフー’のナイト・ガウンを羽織っていた。美しい緑色である。そして黄色の刺繍糸でPとある。母親が言うのは、それを自分でしたんだとか。彼はすばらしく素敵に見えた。彼は上機嫌で階段の方へと歩いていった。そしてこの時、母親はペピが階段を降りる誘惑を覚えているのを逸早く察した。そこで彼に<そうね、そろそろ階段を降りる練習をしてもいい頃ね。もう階段を昇ることは覚えたから・・・>と語る。彼女は彼を腕に抱え、ゆっくりと彼の足を片足ずつ前へと降ろしてゆく。彼はともうまくやれた。しかし、どちらかというとは階段の途中で立ち尽くしたり、逆の方向に階段を上がってゆこうとする。<もう今日の練習はこれで十分だわね>と母親は言って、彼をバスルームへと連れていった。

母親はパニーちゃんを手にして、それをペピが入浴している間眺めていられるようにと棚の上に置いた。ペピはそれに指差しをして、一緒にお風呂に入りたい旨を訴えた。が、母親が<パニーちゃんはね、濡れるの嫌なのよ>と応える。すると彼は理解したらしく、ぐずり声を止めた。母親は彼のガウンを脱がせ、そして彼をお湯の中へとジャボンと入れた。彼はそこに座っていた。間もなく彼はプラスチックの瓶を手にして、それを口に近づけ、飲もうとした。それからその瓶を逆さにして水を垂れ流した。母親は彼に手を貸して、瓶の中に水を入れようとする。それからペピはそれを口へと持ってゆく。母親は、<ほんと、飲んでるんじゃないわよね>と言う。彼はちょっと悪戯っぽい笑みを浮かべて、クスクス笑う。それからその瓶を水の中に放した。母親はゆっくりと彼をお湯の中に横たわらせた。彼のからだを洗い、そしてシャンプーをする。ペピはしばらくおとなしくしていた。母親は、彼がきつとお湯の中でオシッコをしたに違いないわと言い、続けて<あらまあ、でも気にしない。おまえさんのオシッコだもんね、誰も気に留めやしないわよね>と、クスクス笑いをした。ペピは体を起こした。バスタブの中にはたくさんものがあり、いくつかは浮いており、その他のお湯の中に沈んでいた。ペピはそれらを手探りする。体の位置をあちこち動かして、それに水飛沫をバンバンとちょっと暴力的な勢いである。一度彼は「パニーちゃん」の方に向き直り、母親にそれを指さす。何やら口でモゴモゴ言っている。母親は<そうそう、おまえさんのうさぎさんだわね。ほらね、見てるでしょ・・・>と言う。彼は再びお湯を掻きまわすやら叩きつけるやらを続ける。それ

から偶然にも彼は栓のプラグを抜いてしまう。母親は〈あらまあ、やっちゃたわねえ〉と言う。明らかにこの偶然事を喜んでいるふうだった。ペピはプラグが何のためなのかよく解ってはいなかった。しかしながら、何やら不思議なことが起きていることに気づいた。お湯がくるくると渦を巻いて、排水管へと流れていったから！彼はそれを熱中した目つきで、とても慎重に、とくと調べるふうにしばし眺めていた。やがてタブの中のお湯は全部なくなってしまった。私はなくなったと思ったのだが、ペピは直感的にまだ残っていると思った。確かにどこかにある。それはスポンジだった。おそらく彼はそれを感じていたんだろう。手でそのスポンジを掴んで、絞った。すると結構な量の水が出て、ゆっくりとプラグ・ホールへと流れていった。恰もその流れを止めようとするかのように、スポンジをそのプラグ・ホールの上に置いた。だが無駄だった。すると彼はどうしたらもっと水を得ることが出来るかと必死に考え始めたようだった。驚いたことに、彼はバスタブをそのスポンジで拭き始めたのである。確かにバスタブはまだ濡れたままだったから、結局のところスポンジは幾らか水を吸ったわけで、彼がそれを絞ると、実際に何滴かの水が落ちてきたのであった。私はびっくりして、一体どこからそのような知恵を得たのかと怪しんだ。母親は、〈ほらね、もう無いわね。全部流れてしまったよ…〉と言って、彼をバスタブから出そうとした。しかしペピはまだそこを去る気にはなっていなかったので、ぐずって激しく抵抗を試みた。母親は彼を片方の腕に抱え込み、それからキッチンに行き哺乳瓶をどうにか手にし、ペピを彼の部屋へと運んだ。

しかし直に、彼は母親がタオルで彼のからだを拭いている間にその腕から逃れた。部屋の隅へと走ってゆき、たまたまそこで鏡を発見した。悪戯っぽくそれに微笑みかけている。彼は「私(の映像)」をそこに見ているのである。その鏡にはわれわれのお互いに見合っている姿が映っていたから…。それから足元にあったボールに興味を持ち、それを蹴った。それを掴むと、私の所にまっすぐやってきて、それを手渡した。ここで母親は、彼を惹き付けるアイデアを考えた。彼女はバニーちゃんをペピのオムツで包んで、ペピにそれを見せて、〈ほらね、バニーちゃんがおまえさんのオムツを付けてるよ。もうじき寝んねするんだってさ…〉。どうやらそれが彼に気になったらしく、ゆっくりと、やや気後れがちに、それに近付き、そしていきなりそのぬいぐるみを掴むとそのオムツを払いのけた。そしてそのバニーちゃんを手にして私のところに来て手渡した。恰も〈この邪魔者は要らないから、これ持っててよ…〉と言わんばかりなのであった。そこで私はそれを膝の上に置いた。母親は哺乳瓶を振って彼の注意を引こうとした。この時ばかりはペピも騒ぎ立てずに、母親のところに戻っていった。母親は彼をマットレスの上に横にして、哺乳瓶を与えた。〈ちょっと熱いかな？〉と彼にちょっと不安げに尋ねた。そうだったみたいだが、ペピは殊更何も言わなかった。そこでそれをどけた。〈あらあら、おまえさんのバニーちゃんはどこに行っちゃったのかな？〉と彼女は部屋の中を見渡したので、私が彼女にそれを手渡した。今度は彼のバニーちゃんは彼の身近にいた。実際に彼はそれを片方の手でしっかりと握っており、同時にもう片方の手の親指を口に咥えて指吸いをしていた。彼は十分におとなしくなっていた。おそらく彼の多忙な一日も終わりに近付いたと分かったのだろう。その一方で母親は彼にオムツを付けるのも終えて、寝間着を着せていた。それから彼女は彼を起き上がらせた。ペピの眠気はまだのようだったので、母親はまずベビーコットへ行き、彼の寝床を整えた。この間ペピは私のところにやって来て、再びバニーちゃんを私に手渡した。それでまた私はそれを膝の上に置いた。さてここですべての準備が完了し、母親は彼をベッドへと運んだ。それ

から彼に哺乳瓶を与えた。そしてバニーちゃんはどこかで見回した。私がそれを彼女に手渡すと、彼女はそれをいつものように彼のベッドの隅に置いた。ミルクは大丈夫のようだった。ペピはとても落ち着いて飲んでいて。母親は電燈を消し、小さな豆電球だけを点けたままにして、時計のネジを巻いた。そのチクタクの音が夜間に彼の‘お連れ company’になってくれるらしい。さらに5分ほど掛けて辺りに散らばっていた玩具類を片付けた。この時点で、ペピを一人にしておきたくない理由が彼女側に何かあるのだろうかとは私はちょっと訝った。おそらく、他の何か、例えば哺乳瓶のミルクが熱かったので、飲ませるのが遅れたこともあり、大丈夫かどうかを確認しておきたくてちょっと長居したのであったろう。

[※※補足；Mrs. Pは親しい友人から電話で第二児出産の知らせを受け、大いに喜ぶ。だが珍しく幾らか動揺している様子が認められた。この数ヶ月後に彼女は再び妊娠する。(2014/07/25 記)]

ようやく彼女は静かに彼の部屋の扉を閉め、それからわれわれは次回の訪問について相談した。彼女はHead-mistress(校長職)に採用が決まり、新しい赴任先に就くことになっていたのだ。それは翌週の月曜日からは始まる。それでわれわれは、おそらく再来週までは私の訪問を見合わせ、それから彼女の新しい生活が安定してきた時点で、私の方に連絡してもらおうという取り決めをしたのであった。

■ 後記 ■

この時期、徐々にペピに母親から‘離れる’動きが見られた。俄然「外側の子ども outer child」へと向かう、内なる促しの兆しとも言えよう。母親の<抱っこさせて・・>との誘いに彼が素っ気ない態度を取ったのがむしろ興味深い。だが、必ずしもそれはお母さんを‘断念する’(let her go)を意味しない。勿論のこと、いつでも自分が戻れるところとして母親を確保しているつもりなのだ。明らかに、ここでそろそろ第二子を産むべきか産まざるべきかの煩悶が母親の内にあつたと認められる。その承認をめぐって、ペピとの間に微妙な‘駆け引き’が生じていることが覗かれる。水面下の攻防戦とも言える。<まだまだペピは赤ちゃんなのかしら、それとももうそろそろ‘大きな男の子 a big boy’になってくれるのかしら・・>と母親は秘かに彼に尋ねているわけなのだ。ここの微妙な心理作戦が母親の‘遊び’ならびにペピの‘遊び’にも反映されていて、実に面白い。例えば、母親の積み木でタワーを作るやら、輪の中に「おサルさん」を嵌めたり取り外したりといったゲーム考案がそうだし、ペピもまた空缶に積み木を投げ入れたり、取り出したりを執拗に繰り返している。

「外側の子ども outer child」になることは、次の「内なる子ども inner child」に母親を譲り渡す心準備を意味する。それは必ずしも己れ自身が無闇に放逐されることを意味しないということ、それをどう見定めたらいいのか？どのように己れ自身に納得させることが出来るというのか。事はそれに尽きる。どう折り合いを付けられるか、それがどれほど難儀なことか。そのためには「外側の子ども outer child」になることの誇り、気概、自信を育むことしかない。その成長を辛抱強く待たねばならない。これこそが個々にとっての「第二の誕生」と呼んでいいものだ。この時期、母親は心理的な意味では「抱卵期

間」と心得ることが肝要であろう。詰まりのところ、母親というのは《孵卵器(インキュベーター)》なのである。そして我が子の【個我の誕生】を見守ってゆかねばならない。その際、2つの視点が必須となる。「外側の子ども」という方向にナビゲートすることであり、同時に尚も「内側の子ども」として抱えるということ。Dr. Bionのいうところの《binocular vision 双眼鏡的視野》である。そしてここで概括すると、ペピの遊びは、一つは「外側の子ども」へとナビゲートされてゆくことと「内なる子ども」として尚も抱えられているということをどのように両立させてゆくかを巡っての心的葛藤のワーク・スルー〔work through 徹底操作〕が意味されていたと思われる。

ペピは1歳過ぎた頃から、モノの空間移動、モノの位置の変化に心を奪われていた。彼の遊びの殆どがひたすらその‘実践’となる。例えば空箱〔缶〕にモノを入れたり出したり、扉の開閉をも繰り返し飽きることがない。テーブル上の雑誌類を床に落として撒き散らすやら、プランターをどけて他へ移動させるやら…。さらには、積み木・紙類そしてバニーちゃんをも階段の下めがけて放り投げることに執心した。目の前に在るものが無くなる、手で掴めるものが手の届かぬものになるといったモノの視覚変化にどうやら不思議を覚えるらしい。時折私に玩具やらバニーちゃんを手渡してくれることもあったが、恰もモノ〔対象〕に及ぼす行為主体としての己れの能動的パワーに魅入られているかのようだった。「いないいないばあー」の新たなるバージョンが彼の遊びの全てともいえた。母親の買い与えた【びっくり箱】が一つあったが、<Where's baby(赤ちゃんはどこ)?>の問い掛けに、蓋を開けて、中からお人形さんが飛び出るのをジッと凝視し、蓋を閉めて、又開ける。そこに心的葛藤が微かに覗かれるものの執拗に繰り返す。それやら、電話機を使う遊びで(不在の)父親を相手に会話する母親をも模倣している。ここにいない誰か〔何か〕がどこにいる〔アル〕か探し当てることにも興味を示す。勿論、母親からの誘いで‘隠されたもの’を探し出す遊びにも興じていたわけだが。或る日(1975/09/18)、私が掛けている眼鏡に興味を示し、頻りに触りたがる。そこで私はそれをバックの中へと隠してしまう。その後どう勘づいたものやら、ふと気付くと何と彼は私のバックの中にそれを見つけ、手に掴んでいたということがあった。母親が折々<You are so determined! (ほんと、強情なんだから…)>と呆れ顔で彼に言うことがあったが、それも物事のありようを究めずにはいられないといった【認識愛】のしわざかとも思う。



もう一つ彼が心奪われていたものに、内と外の境界もしくは自他の区別がある。当然そこには葛藤が絡まる。それは母親の顔の執拗な探索から始まった。鼻を掴むやら頬をつねったり叩くなどの攻撃性を帯びてゆく。プラスチック製のハンマーで母親の身体への攻撃を執拗に繰り返したり…(1975/06/19)。やがて母親の指示に従い、<ペピのお耳は?お鼻はどこ?>に的確に反応してゆく(1975/07/17)。「自分」というのと「別の誰か」との区別が徐々に付いてきたかのようだった。さらには「誰かの何か」といった‘所有’もしくは‘所属’にも自覚が芽生えたかのようで、或る日(1975/09/25)

のこと、キッチンで彼が食器棚を注視していた折に、<Mummy's cupboard(ママの食器棚だ)・・>と呟く声が聞かれた。また或るとき、床に座って指吸いをしていたペピがふと私の足元に眼を遣り、履いていた靴に触った。そして何やら意味ありげに笑う。そのしばらく後に私の脚を蹴った。どうやら身体接触を求めているらしい印象で、自他の身体的境界(body boundary)も烈しく意識され、それもかなり焦れてゆくのが分かった。敢えて言うならば疎外感である！私の膝の上に乗りたいがや、私を後ろから抱きすくめ、おんぶをしたがったり、ちょっと油断すると髪の毛をぐちゃぐちゃといじられるということもあつたりした(1975/10/16)。当然、この頃にはやがて生まれてくる母親の胎児への意識も芽生えていたはずだ。夜泣き(夜驚)が報告されている(1975/11/25)。攻撃性を募らせてゆくなかで、その結果母親の身体に及ぼす危害に対して気掛かり concern が嵩じていたのがその原因であろう。まだまだ両親の愛情と注目を希求する‘甘えんぼうのペピ’であった。その一方で極めて自発的かつ自信ありげなペピであることには変わりなかった。また彼が父親を求めることもそれ相応に頻発し、いつしか<He's Daddy's boy! (ペピはお父さん子だよなえ)>といった風情にも彩られてゆく(1975/11/25)。こうして彼は2歳を迎えようとしていた。そして彼が2歳4ヶ月頃、弟が誕生したのだ。この時期に、母親はそろそろペピを午前中《プレイグループ》に参加させようかと考えていた。<どうしても年上の大きな子どもたちは彼に対して甘やかして(forgiving)しまうから、やはり同年齢の遊び友達がペピには必要と思うの・・>と語っている。確かに自立への自信を得るであろう。いよいよペピは‘お兄ちゃん big brother 路線’をひたすら邁進することとなる。親たちは彼を地下鉄に乗せに行くやら、そしてそこから家に電話を掛けるといった具合に積極的にその水路づけを怠らない。こうしてさまざまに、ペピの‘外の世界’が拓かれてゆく。そして「外側の子ども outer child」が誕生してゆくのだ。そこにはおそらく彼固有の生があり、そしていずれ彼は己れの居場所をものにするであろう。

ペピの母親Mrs. Pは、幼児教育の現場での数知れない子どもらとの経験からして、こうした成長過程がどれ程困難を極めたものかを知り抜いていた。親の身勝手さ、無理解、理不尽、横暴に耐え、「内なる子ども」としてはもはや放逐されたまま、「外側の子ども」としても未だこの世に居場所を持っていない、そうした‘彷徨(さまよ)ういのち’に日々遭遇している。これら疎まれ卑しまれ、そして傷の癒えない「いのち」は報復せずにはいられない。遮二無二悪鬼ともなり阿修羅ともなり・・。心的葛藤はワークスルーされないまま行為化(アクティング・アウト)されてゆく。巷に蔓延るいじめやら万引といった非行、児童虐待、家庭内暴力、育児放棄、そして故意・過失を問わずあらゆる犯罪やら・・。詮ずるところ、悪行・悪癖・悪疾のすべての根っこに、そうしたemotional turmoil (情動的混乱)が巣食っているのではなからうか。われわれは生涯試されてゆく。弟妹なるところの‘次の子ども’が産まれるときに、もしくは成人後に自らの子どもが産まれるときにも・・。そしていつしか、あらゆる‘他者’なるものとは即ち‘同胞’であることを悟るに至る。我ら人類の未来、地球の未来はいかにして擁護されるものか。それは【母親の‘内なる子ども inner-child’】への思い遣り concern から始まり、それらを敢然と守らんとする我ら個々の志に拠る。《同胞愛》こそが眼目となろう。(2014/07/25 記)

【イラスト画;「ジャンプする仔馬」、[愉快なカエル]&「ペピのパニーちゃん」 1981】